

3. 放射線技師の交代に伴うマンモグラフィ画像の変化に関する検討

甲斐 敏弘（新都心レディースクリニック）

【はじめに】 医師 1 人、放射線技師 1 人の乳腺クリニックにおいて放射線技師の交代は大きな問題となる。当院ではマンモグラフィ撮影の指導的立場にある技師（技師 1）から、ほぼ未経験の技師（技師 2）への交代を経験した。この間のマンモグラフィ画像の変化について検討した。【目的】 マンモグラフィ撮影技術評価のうち特にポジショニングについて①技師 1 と技師 2 の比較、②技師 2 の経時的変化について調べる。【対象と方法】 市民検診受診者のマンモグラフィ画像のうち、同一症例で経時的に技師 1 と技師 2 とが撮影している画像で、なおかつ技師 2 の撮影時期を「採用直後」、「講習会受講直後」、「講習会受講後 6 月」の三つの時期に分け、それぞれ 10 名をランダムに抽出し MLO 60 画像を選択した。画像評価は精度管理中央委員会での経験の深い技師に検討の主旨は伝えず、ブラインドでランダムに採点をお願いした。【結果】 ①技師 1 と技師 2 の総合点数（画質＋ポジショニング 80 点満点）は、技師 1 は平均 59.6 点、技師 2 が平均 59.8 点で総合点数では技師 2 の点数がやや高いものの両技師間の点数に有意の差はなかった（ $p=0.878$ ）。②ポジショニング（24 点満点）では技師 1 は平均 19.6 点、技師 2 は 18.4 点で有意に技師 1 が優れていた（ $p=0.045$ ）。③技師 2 の時期による変化では、講習会参加直後にはやや点数が低下したが、講習会 6 月後は「乳房下部」以外は改善した。【考察】 マンモグラフィ画像評価のうち特にポジショニングは放射線技師の撮影技術を評価する方法としても利用できる可能性がある。技師 2 は講習会直後には一時的にポジショニング点数の低下を認めたが 6 月後には改善している。また、ポジショニングの項目で「乳房下部」が改善されるならば技師 1 の点数を上回る可能性が考えられる。画像評価は施設のマンモグラフィの水準の評価ばかりでなく、各技師のポジショニングの改善点を明確にすることができると考えられる。

〈セッション 2〉

症例 1

座長：平方 智子

4. giant FA の 2 例

山田 勲，東郷 望，須藤 幸一

川合 重夫，荒井 剛，東郷 庸史

（恵愛堂病院 外科）

【症例 1】 13 歳、女性。4 か月前より左乳房が徐々に腫大し、発赤、びらんを伴うようになったため、小児科を受診し乳腺炎疑いで紹介となった。左乳房全体を占める弾性硬 15×10cm の腫瘤を認め、皮膚の一部に発赤、びらんを伴っていた。CT、MRI では境界明瞭の充実性腫瘍で、内部に繊維性の隔壁を有していた。正常乳腺はほとんど認められなかった。平成 21 年 6 月 15 日、乳房下切開で腫瘤摘出術を行った。病理報告は juvenile fibroadenoma であった。【症例 2】 47 歳、女性。4 か月前に腫瘤があるのに気付いたが放置、徐々に増大するため当院を受診した。左乳房 AC を中心とする弾性硬 12×10cm の腫瘤で Delle を伴っていた。エコー、CT では分葉状の大きな腫瘤であり、乳腺葉状腫瘍が疑われた。針生検では、線維腺腫と葉状腫瘍の鑑別困難であった。平成 22 年 1 月 8 日、乳房下切開で腫瘤摘出術を行った。病理報告は葉状構造を示す成分は無く、fibroadenoma であった。

最近上記のような 2 例の giant FA を経験した。若干の文献的考察を加え報告する。

5. radiation recall phenomenon 発症の乳癌温存術後症例

藤澤 知巳，柳田 康弘，平方 智子

（群馬県立がんセンター 乳腺科）

radiation recall phenomenon は radiation recall dermatitis（以下 RRD）とも呼ばれる。放射線治療後の皮膚に化学療法に惹起された皮膚炎と定義される稀な疾患である。今回ハーセプチン投与中に発症した RRD を経験したのでこれを報告する。45 歳左乳癌。T2N1M0, stage IIB にて術前化学療法施行。HER2（+）にて CEF 4cycle 後 Docetaxel＋ハーセプチン 4cycle 施行した。手術は温存術を行い病理学的治療効果は grade III であった。術後補助療法として残存乳房に放射線治療（50Gy/25fr）及び化学療法としてハーセプチン単剤投与（8→6mg/Kg）、内分泌療法として TAM20mg/day を行った。ハーセプチン投与 2cycle 目 day 7 より乳房照射部位に一致した皮膚の発赤腫脹を認めた。血液検査にて炎症反応を認めなかった。allergic reaction を考慮、ステロイド内服と全ての内服薬中止を行った。14 日後に皮膚所見の改善を認めたので